



第30回 広島参加報告集

戦後70年の節目に、占冠村は、「平和の村宣言」30周年を迎えました。

広島平和体験学習事業が取り組まれ、30回目となる今年は、中学生に加え、大人の方も派遣されました。

8月10日には、コミュニティプラザで「平和を考える映画会」が開催され、60名が広島平和体験学習の参加者の報告に耳を傾けました。

8月4月から7日の日程で広島市へ平和体験学習に参加された中学生4名・引率者2名、村民4名から報告をいただきました。

原爆による被害について

トマム中2年 本田 万葉

私は平和資料館に行つて原子爆弾の被害によつて焦げてしまった物をたくさん見てきました。特に印象に残っているものは、中学生が実際に着ていた制服です。制服を見て感じたことは、急に原爆が落とされてしまつてすぐく怖かつただろうということです。同じ中学生として私はあの立場にいたら生きる気力もなくなつてしまふと思ひます。

広島YMCAで当時16才だった藤井さんにお話を聞きました。藤井さんは「亡くなった家族のために頑張つて生きた」と話していました。被爆しながらそういう気持ちになつて生きていてすごいと思いました。また、原爆についてはたつた一発であんなに多くの人々が亡くなつてしまふことが恐ろしく悲しくなりました。何の罪もない人々がこんな被害にあつたということが、とても許せないです。原爆は火災の被害だけでなく爆風や熱風もくるそうです。爆心地から約600mのところだと熱風は2000度にもなるそうです。それで近くにいた人は黒くこげてしまつて本能で行動してしまいます。です

から、黒い雨を飲んでしまつて亡くなる人もいました。

これからはこんな悲惨なことが絶対に起こらないように、戦争の悲惨さを家族や友達に伝えていきたいです。

原子爆弾の恐怖

トマム中2年 江頭 ひかる

原子爆弾とは、罪もない大勢の人命を奪う、この世に絶対にあつてはならないものだ。私は改めてそう思ひました。

私は、入市被爆者の藤井澄さんのお話を聞きました。藤井さんは、16才の時に被爆地から500mの場所に住んでいましたが、その前の日に伯父の家に泊まつており、直接被爆はしませんでした。しかし、原爆投下後の広島に行つたことで、その15年度、突然白血球が増えて倒れてしまい、被ばくの症状があらわれたそうです。火傷はせず無傷なのに亡くなつてしまつたり、病気で苦しんだりする内部被曝は、火傷以上に恐ろしさを感じました。そんな藤井さんが生きるのに必要なことは、「目標を持つて生きる」ことだそうです。静かな語り口調の中にも力強さがありました。私も強い目標を持つて生きようと思いました。

ました。

核兵器は、たくさん命を奪うものです。なので核兵器を世界からなくし、ずっと平和であるために私に何ができるのかをこれから考えていきたいです。

強く生きる事

占冠中2年 長瀬 千温

「強く生きて行く。」
今回広島でお話をしてくださつた新原さんは、被爆時16歳で、勤労動員で働いていたそうです。

新原さんは、8月6日もいつものように外で働いていました。その時に、突然いなびかりのように辺りが光りました。ドガンと大きな音がなり、その後爆風が起きました。爆風で巻き上がったほこりで、辺りが暗く何もできなかつたそうです。時間が経ち明るくなつた時、新原さんが見たものは黒くげになつていて、鉄骨だけが残つた建物でした。壁は、全部破壊されていたそうです。

その後、新原さんは初めて人の死体を見たそうです。川に行つたら、10人くらいの人が合掌していて、川の中にお母さんと子どもが手をつないで亡くなつていたそうです。その二人は、顔が真っ黒で目しか見えない状態だったそうです。

新原さんが言つていた、「強く生きる事」というのは、自分が辛い思いをした経験であつても、忘れることなく「戦



平和を考える映画会



広島平和体験学習出発式

争はもう絶対にならない。「戦争は怖いものだ。」という強い意志を持ち、後世に伝えていくことなのだ。私は感じました。

私も新原さんのように強い意見を持ち、戦争の恐ろしさや、悲惨さを後世に伝えていきたいです。

原爆の恐ろしさ

占冠中2年 鈴木 隼人

ぼくは、原爆ドームを見て原子爆弾の恐ろしさを知りました。

ぼくが最初、原爆は爆発がすごいだけだと思っていました。なので、なんで何十万人の人が亡くなってしまったのか疑問に思っていました。

ですが、原爆ドームを見たり話を聞いて、原爆は、爆風、熱、放射能が特に恐ろしいのです。もともと家があった所や建物があった所があたり一面焼け野原になっていました。家を吹き飛ばし大きな建物も全てなくせるほどの威力だったのです。ぼくはその時やつと原爆の恐ろしさを知ることができました。他にも、原爆が落とされた直後の温度は3000度から4000度にもなっていたそうです。近くにいた人は、皮膚がとけてなくなってしまうほどです。その中でも、無傷だった人も放射能をあびてしまっていて死んでしまふ人もいました。

このように、原爆は何十万人もの人々を殺すほど強烈で恐ろしいものなのです。この原爆を使われないようにするために戦争は何があってもやっつけてはいけないの

です。これから、この恐ろしさを知らない人に原爆の恐ろしさを伝えて、戦争はやっつけてはいけないと思ってもらいたいです。

8月6日広島を訪れて

引率者 岡本 繭

(占冠中学校教諭)

「戦争は二度としてはいけない。」

原爆被害者の方は、当時のことを語る中で何度も何度もこのことを繰り返していました。

原爆被害者証言のついでで、お話を伺った方は当時16歳。原爆投下の報せを受けて家族や友人を探しに市内へ入ったこと、そこで目にした悲惨な現実を話してくださいました。友人や親類の亡くなった姿を見つける度にどれほど辛い思いをしたか。・。当時を思い出すことが辛く、口を閉ざしている被害者の方も多いそうです。それでも証言を続けているのは若い世代に伝えておくことがあるから。

「戦争を二度と起こしてはいけない。」目の前の方から聞くこの言葉が今までになく強く心に響きました。

この言葉を受け取った私たちが、また次の世代へと引き継いでいかなければ。

当時体験した方の言葉ほど力はなくとも、平和な世界に、核に頼らない世界にと伝え続けていきたい。平和を願い、戦争はしないと考える人が一人でも多くなるとほしい。そう改めて思いました。そのために、この平和体験学習が未永く続いていくことを願います。この活動を支えて

くださる多くの皆様に感謝いたします。

受けとつたもの

引率者 荒木 健地

(占冠中学校教諭)

広島から北海道に帰る飛行機の中で様々なことを考えていた。トランクがお土産でいっぱいになるように、この旅で学んできたことが胸の中で確かな重みを感じさせた。

「本音は伝えたくはない。思い出したくない。」と新原清人さんは語った。新原さんは勤労動員先の工場で被爆した。不気味な光、爆風。一瞬で吹き飛んだ街並み。黒焦げの死体。全身を焼かれ、ただれた皮ふを引きずって歩く人々。そんな地獄は思い出すのも辛い。被爆者と同情されたくもない。過去に縛られず今を生きたい。そんな思いからこれまで友達にも家族にも原爆の話はしなかった。

ではなぜ今語り部を引き受けたのか。「たしかに辛いけど、伝えなくてはならない。」と新原さん笑いながら語った。原爆に友や家族を殺された。それでも負けじと生きてきた男の力強い笑顔だった。

実際に体験した方々の話をもっと多くの人に聞いてもらいたい。しかし戦後70年、被爆者の平均年齢は80歳を超え、いつかは実際に体験した人の話は聞けなくなる。だから私たちは、彼らから原爆の、戦争の恐怖を受け取り、次世代に伝えなくてはならない。この胸の重みに向き合うのがその第一歩なのだろう。



広島平和体験学習参加報告

長谷川 静子

8月4日から8月7日まで、広島平和体験学習に参加させていただきました。1日目は移動、2日目は広島市内の見学、3日目は広島平和記念式典への参加と被爆証言のつどいへの参加、原爆ドームや平和記念資料館の見学、4日目は移動という工程でした。

広島市内は、戦後70年の節目ということもあり、海外の方も含めた多くの人の姿が見られ、70年前に焼け野原になったとは思えないほど発展していました。現在は牡蠣の養殖、鯛やたこ漁、かんきつ類の生産、マツダをはじめとした自動車製造、造船、筆や琴などの伝統工業など様々な産業が盛んです。たった70年で、これだけの復興・発展を遂げるためには、多くの方の尽力があったことは想像に難くありません。

平和記念式典は、朝7時前に会場に到着したのですが、既に会場は大変混雑していました。参加者の年齢層は幅広く、海外から来られた方や、様々な思想・宗教の方など多岐にわたっており、平和・核廃絶への願いは皆共通のものであると強く感じました。

被爆証言のつどいでは、現在77歳で被爆当時7歳だった山田さん（仮）からお話を伺うことができました。爆心地から3.6km離れたところにあるご自宅で、被害に遭われたそうです。山田さんは、当時のことを思い出すと悲惨な思いが再燃するというので、最近までは証言のつどいに参加できなかったそうです。

山田さんのお話では、原爆投下直後から

現在への、被爆者に対する差別や偏見に關わる話が印象に残りました。戦後間もない頃は、被爆による影響が被爆者から「うつる」という偏見をもたれて差別を受け、就職や結婚等といった様々な場面でご苦労をされたということでした。また現在も、被爆者健康手帳取得によって受けられる医療費の支援に対しての妬み等から差別があり、被爆者健康手帳を取得することをためらう方が多いそうです。

山田さんのお話からは、70年経過した今現在も、平和や豊かさを手放して享受できているわけではなく、多くの悲しみや苦しみを抱えていることが伝わってきました。今回の平和体験学習では、戦争はその当時の人的・物的被害に留まらず、平和となつた現在にも、当事者にしか分からない形で傷跡を残すものだとして強く感じました。戦後、復興・発展したからといって、戦争が無かつたことになるわけではありません。

今回の経験をもとに、教職に就く者として、平和の大切さはもちろんですが、偏見・差別をもつことなく、正しい知識と判断基準をもち、物事を客観視することの大切さも子どもたちに伝えていきたいと思えます。

広島で学んだこと

古屋敷 あかね

今回、広島へ行き、資料館で被爆者たちの遺品を見たり、生きている被爆者の方からお話を聞いたりしました。それらを通して強く感じたのは、「もう二度と戦争を

起こしてはいけない」ということです。

資料館で被爆者たちの遺品を見たとき、想像を絶するその者たちの痛みを思うと、なぜこのような事が起きてしまったのかという悲しみや悔しさを感じました。それと同時に、この犠牲があつたからこそ、今の平和な日本があるのだと思ひ、複雑な気持ちになりました。その犠牲を無駄にしないためにも、平和な日本を守っていかなくてはならないと思います。

戦争はしてはいけないものと当然のように思っていた私ですが、被爆者の方の「あんなことがもうあつてはいけない」という言葉が胸に突き刺さりました。また、被爆者の方が戦争を起こさないうちに「教育が大事だ」ということを強くおっしゃっていました。教師として、自分にできることは何かをじっくりと考え、今回広島へ行って学んだことを子どもたちに伝えていきたいと思ひます。

広島平和体験学習参加報告

長谷川 朗岐

1945年8月6日当時の広島は人口約35万人の都市でした。その中心部上空580メートルで核爆弾が炸裂し、同年12月末までに推定で14万人というおびただしい数の人々が尊い命を奪われました。半年にも満たない期間で人口の約4割が失われたということになります。

この14万という数字の内容を見ますと、氏名が判明している犠牲者が8万8978名であり、14万人とは5万人以上の開きがあることから、人知れず犠牲となつた方



の数が膨大であるということがうかがえます。

被爆者の方々はそれから70年経過した2015年現在も、被爆者健康手帳の交付数から見る被爆者の数だけでも18万3519名とあり、今も多くの人が2つの原爆の影響に苦しむ生活を強いられています。被爆者の平均年齢は80・13と80歳を超え、核使用がもたらす現実をいかに後世に語り継ぐかというのも差し迫った問題になっています。

私は、式典のあと被爆者である山田さん(仮名)に話を伺いましたが、当時の記憶は苦々しいものであり、思い出しながら話すのは楽なことではないとおっしゃっていました。お話の中でぜひとも占冠村の方々へお伝えしたいことは、現代社会の風潮が戦前の様相に近づいているかのように見える。」とおっしゃったことです。

確かに国会で安全保障にかかわる法律について議論されている最中でしたので、戦争を経験した方がそうお感じになるのは当然のことと思います。

山田さんは「戦争参加の議論をする前に、戦争が始まることかどうということかを知ってもらいたい。戦争が始まれば物資が消える。生活苦が理由での犯罪が多発する。今ある法律も見せかけになってしまい国内が荒れる。戦争はつまらんの一言だ。」とおっしゃっていました。

私は個人として何か政府にものを言うつもりはありませんが、政府の勝手な判断で国民が戦争に巻き込まれてゆくことは、多くの人たちと同じく承服できることではありません。戦争に参加しなくても、国や人

は豊かになれるはずで、豊かさがよいものばかりをもたらすのではないが、争いの絶えない環境よりは遥かによいのです。

核兵器という観点からも、それがなくなる気配は未だにありません。国家間外交の交渉力が武力である核弾頭の保有数と連動しているからです。並びに現代社会は、いつテロに核が使用されるかもわからない状況だといえます。現存する核弾頭数は推定で1万5855発、核保有国は9カ国にも上ります。そしてその一発一発が威力と精密さを増しています。私たちにはこれらのことも踏まえた上で、未来について考えなければならぬでしょう。

正直このような話は普段生活している中で、さほど考えないことですが改めて戦争と平和を考えることができました。この度はこのような機会を設けていただきありがとうございました。

生々しい記憶と記録にふれて

八木 浩美

この度の平和体験学習の中で、被爆者の体験講話と平和記念資料館がひと際印象に残っています。一人ひとりの語りは、被爆の一言ではくれないほど多様で、投下から70年も経てもなお、拭い去れないほど深い悲しみや痛みに包まれており、戦後、同時代を生きる日本人にさえ被爆の事実を隠さなければならぬ人や、今もなお、爆風の影響で発症した白内障等、心身ともに現在も苦しみが続いている。ということに、やるせない気持ちがわきました。

平和資料館では、講話で語られた悲痛な

記憶が具体的な記録として示されています。一瞬で奪われた原型をとどめていない衣服、三輪車、弁当箱、そして人々……。これまで「戦争」は正直縁遠いものでした。戦争を知らない世代として生まれ育った。記憶や記録に直接ふられる機会は多いとは言えず、かと言って、本やテレビ等のメディアで描かれる戦争は、何らかの色が加えられているようで興味を持っていません。それが、被爆者の方々の語りという記憶と、平和記念資料館の展示という記録に直接ふれたことで揺さぶられました。本当にどちらも生々しかったです。だからこそ、社会の押しつけや誰かからの借り物ではなく、これから将来を担う子どもたちや若者たちに、平和な暮らしを存続してほしいと願うばかりです。この思いがこれからも私なりに、戦争と平和について学び続けていく際の支えになると信じております。また、多くの方々に、戦争の悲惨さ、平和の尊さを知っていただきたいと思います。最後になりましたが、戦後70年という貴重な節目に、このような機会を与えていただいたことを心から感謝いたします。

